

博士論文要旨

論文題名：メルロ=ポンティのソルボンヌ講義における中期他者論の再構成
——人間の科学と現象学

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
サカイマイコ
酒井麻依子

本論文の目的は、従来のメルロ=ポンティ研究においてその重要性が見過ごされてきたメルロ=ポンティの中期講義録、「ソルボンヌ講義」（1949-52年）の体系的な読解を通して、表現の問題系によって特徴づけられる彼の中期他者論を再構成することにある。ソルボンヌ講義は児童心理学と教育学の講座として開かれた一連の講義であり、そこでは心理学だけでなく、文化人類学、言語学、精神分析、史的唯物論など広範な人間の科学（人間についての科学）の成果が取り上げられている。メルロ=ポンティの思想において、心理学、社会学などの人間の科学と哲学・現象学は相互包摂の関係と定義されており、それゆえ本論文ではソルボンヌ講義における彼の人間の科学への言及を現象学的他者論として読解した。ソルボンヌ講義では、人間の科学における観察者と被観察者（被験者）の関わり、大人と子供の関わり、男女の関わり、異なる文化間の関わりなどが論じられており、これは主体と他者の関わりを論じた他者論にほかならない。

本論文では、ソルボンヌ講義に見られる他者論を再構成するという目的の下に、三つの問いを立て、それぞれの考察に第一部から第三部までの各部を当てる。第一部「我々はいかにして他者を知覚しうるのか」では他者知覚の構造の議論を整理し、第二部「我々は他者をどのようなものとして知覚するか」では他者の現れの様相を問題にし、第三部「我々は他者とのように交流しうるか」では他者との交流の様態を問題にする。

第一部の第一章・第二章では、『知覚の現象学』とソルボンヌ講義「意識と言語の獲得」、「幼児の対人関係」第一部などを用いて、従来メルロ=ポンティの他者論として論じられてきた議論の確認をする。第三章ではメルロ=ポンティの中期他者論の特色である表現の問題を取り上げるためにスタイルの概念を考察し、第四章では言語活動を含めた表現の議論を考察、第五章では表現を介した他者知覚について考察する。

第二部では第一部で明らかにされる「役割として現れる他者」という論点における「役割」の含意を探り、他者が「役割」や歴史的・集团的類型として、あるいは自己表現の「意味」、すなわち思考や人格として、あるいは自由として現れるという論点を、メルロ=ポンティ自身が取り上げる具体的な内容に踏み込みながら考察する。第一章ではソルボンヌ講義以前

のテキストから身体、民族、階級、人種などが「役割」や類型の一つとされていることを指摘し、第二章では精神分析的な意味でのコンプレックスがこの歴史的・集団的類型として論じられていることを示す。第三章ではやはり類型の議論としてセクシュアリティ論を取り上げ、第四章ではメルロ=ポンティによる文化人類学の読解を手がかりに類型の伝承の問題を扱う。しかし、メルロ=ポンティにおいてこれらの類型は人間の表現・行動・性格などを決定する「原因」や「運命」ではなく、それを基盤としてこそ人間の自由が可能になるものであるとされており、第五章ではソルボンヌ講義以前のテキストを含めた自由論を經由して、他者の自由としての現れについて考察している。

第三部では、他者知覚が他者の側の表現の問題ではなく、主体の側の対人関係の様態の問題でもあるということから、自己と他者の交流の様態を考察する。第一章では、嫉妬と愛の議論を整理し、第二章では大人と子供の関わりを含めた自己と他者の関わり、つまり交流が現実にはどのようなものであり、そしてどのようになされるべきであるのか、という議論を考察している。

本論文はソルボンヌ講義の体系的読解を通じて、従来のメルロ=ポンティ他者論の解釈、つまり原初的な自他の平和的共存による、平準化された人間同士の約束された共存の他者論に対して、メルロ=ポンティの中期他者論、つまり身体的・社会的・集団的・歴史的類型を通じて人間同士が出発地点において不平等でありながら、努力によって平等な共存を築かねばならないという他者論を提示した。本論文で明らかにされたメルロ=ポンティ中期他者論には、人間が単に原初的交流を可能にする身体であるだけでなく、人種・民族・性などの類型を帯びた歴史的な身体であるという議論が存在しており、それらの類型を通じた他者経験という問題は、文化間・民族間・市民間の分断の進む今日においてこそ重要であろう。